ドイツ連邦共和国大使館　東京
Botschaft der
Bundesrepublik Deutschland Tokyo

DIKTAT
URUND
EMOKRA
TIEIMZ
EITALT
ERDERE
XTREME

極限の時代における独裁と民主主義

20世紀ヨーロッパ史を照らし出す光

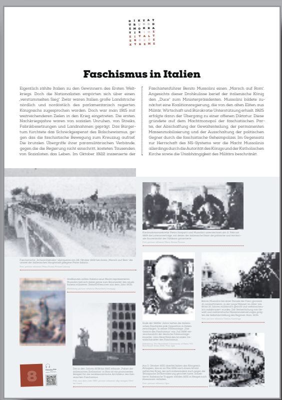
現代史研究所、
ドイツ文化ラジオ、
および
連邦検証基金による
展示会

Institut für Zeitgeschichte
München–Berlin

Ein Programm von Deutschlandradio
Deutschlandradio Kultur

BUNDESSTIFTUNG AUFARBEITUNG

austauschen mit japanischen Plakaten



20世紀の「根源的破局」

1914年6月28日、オーストリア＝ハンガリー帝国の皇太子がサラエヴォで撃たれて死亡した。この暗殺事件が引き金となって、各国間の対立は激化し、軍の動きが活発となった。世界の列強の座にのぼろうとしていたドイツも、これに大きくかつ重要な責任をもって関わったのである。これが第一次世界大戦の始まりであった。ドイツ、オーストリア＝ハンガリー、ブルガリア、それにオスマン帝国が、ヨーロッパの他のほとんどすべての国と、そして後にはアメリカと戦いを交えることとなった。これに先立って、ヨーロッパの労働運動は、迫り来る戦争について警告を発していたが、事態を大きく変えることはできなかった。

ドイツは、ヨーロッパ大陸の覇権を手にしようと、特に東方で広大な領土の獲得を目指したが、他のヨーロッパ列強も、やはり帝国主義的な野心を抱いて戦争に臨んだ。しかし早くも1914年には、西部前線が塹壕戦を繰り広げて膠着状態に陥り、消耗戦の中で多くの人の命が失われていった。当初の高揚した戦争気分は、どの陣営においても冷めていった。1916年にはヴェルダン攻勢とソンム攻勢だけで150万人以上が命を落とした。第一次世界大戦は、ヨーロッパが初めて経験した「産業化戦争」であった。機関銃、戦車、飛行機、潜水艦、火炎放射器、毒ガスが使用され、大量の人間が殺されていったのである。命を失った兵士はおよそ900万人にのぼる。また、これまでのヨーロッパのいかなる戦争でも、第一次世界大戦ほど多くの民間人が犠牲となった戦争はなかった。その数は600万と推定される。戦争の暴力の経験は、その後もずっと人々を苦しめ続け、戦後ヨーロッパにのしかかる重荷となった。

ヴェルダン近郊の塹壕陣地に向かうドイツの歩兵部隊、1916年初頭。戦闘は1916年2月21日から12月20日まで続いた。何カ月にもわたって血みどろの戦いが繰り広げられたヴェルダンの戦いは、塹壕戦の悲劇と不毛の象徴となった。

Photo: picture-alliance / ZB

新しい時代の始まり

1917年4月、アメリカ合衆国が参戦した。すでに1915年にアメリカ市民の命を奪っていた無制限潜水艦作戦を、ドイツが大西洋において再開したのを受けてのことである。アメリカ合衆国のほとんど無尽蔵の資源により、戦況は決定的に西側列強の有利に傾いた。アメリカ大統領ウッドロウ・ウィルソンは、この戦争を自由と民主主義のためのイデオロギー戦争として正当化した。ロシアも、1917年3月に帝政が倒れると、この自由の戦いに参加すると思われた。しかし早くも11月、リベラルな臨時政府は共産主義のボルシェヴィキのクーデターによって倒されてしまった。ボルシェヴィキは、直ちに広範な社会改革を導入し、また平和条約の早急な締結を約束したが、1917年11月の議会選挙でボルシェヴィキに投票した者は全投票者の4分の1に過ぎなかった。するとボルシェヴィキは議会を解散し、レーニンの指導のもとに共産主義独裁体制を築いたのである。こうして4年にわたる血みどろの内戦が始まった。西側列強の干渉にもかかわらず、この内戦に勝利をおさめたのはボルシェヴィキであった。ただ、革命の火花を世界に広げるという彼らの希望は、当初はそのきざしが見られたものの、実現しなかった。

ヨーロッパの政治的舞台へのアメリカの登場と、十月革命によって実現したロシアにおける共産主義勢力の権力奪取は、時代を画する出来事であった。ここにはすでに、後の冷戦時代の体制対立の萌芽が潜んでいる。

モスクワのスヴェルドロフ広場で、内戦の最前線に出陣する赤軍兵士に向かって演説するレーニン。演壇の右に立っているのはレオ・トロツキー。後にスターリンの指示によりこの写真は修正され、トロツキーの姿は見えなくされた。写真は1920年。

Photo: bpk

ドイツにおける変革

1918年の夏、ドイツの敗北は避けられないものとなった。3月に成立したロシアとの講和も、事態を変えはしなかったのである。講和条件を少しでも良くしようと、軍指導部は議会制君主政体への移行を模索していた。10月、海軍になお今ひとたびの出撃が命じられると、水兵たちは反乱を起こした。これが革命ののろしとなった。11月9日、革命はベルリンに波及し、その日のうちに共和国の成立が宣言され、ヴィルヘルム2世は退位を余儀なくされた。首相に就任したのは、社会民主党の党首フリードリヒ・エーベルトである。こうして11月11日、休戦協定が結ばれた。協定に署名したのは、戦争の責任を有し、戦争を遂行した者たちではなく、民主主義をかかげる者たちであった。社会民主主義勢力は、戦争をめぐる争いの中で分裂していた。社会民主党は、1918年、議会制民主主義の導入に取り組んだ。1919年1月1日にはドイツ共産党が設立され、レーテ独裁（※）を要求したが、社会民主党は拒否した。2月には、憲法制定のための国民議会がヴァイマールで開催された。ドイツ最初の民主主義政体は、この地にちなんでヴァイマール共和国と呼ばれる。民主主義は最初から激しい攻撃にさらされた。社会民主党が率いる政府は、極左による反乱と大規模ストライキに対して軍を動員し、その間、極右の武装集団は反革命を企てた。憲法への賛同を拒否していたナショナリストや保守派は、極右に対してあからさまな共感を示した。1920年3月にはカップ＝リュトヴィッツ一揆が起こる。このとき、民主主義勢力はかろうじてもちこたえることができたに過ぎなかった。

（※レーテ＝労働者や兵士による評議気組織。ロシア語の「ソヴィエト」にあたる。）

革命はベルリンに波及した。1918年11月9日、ブランデンブルク門前のパリ広場でデモ行進をする水兵と市民。

Photo: picture-alliance / ZB

脆弱な講和体制

対独講和条約の調印。1919年6月28日、ヴェルサイユ宮殿。

Photo: picture-alliance / Everett Collection

ヨーロッパで休戦が成立したのは1918年11月である。しかし条約を締結して平和を形成していく作業は、1920年8月まで続いた。パリ郊外のさまざまな場所でさまざまな条約が調印され、これによりヨーロッパの地図が書き換えられた。ポーランドは123年ぶりに待望の独立を回復し、バルト諸国、チェコスロヴァキア、それにユーゴスラヴィアが新しい国家として承認された。一方、ハプスブルク王朝は解体され、ハンガリーは領土の3分の1を失った。オスマン帝国は滅亡した。ドイツは、1919年6月28日のヴェルサイユ条約により、植民地を失い、領土の5分の1近くを失った。ドイツ陸軍は、職業軍人の数が10万人に制限された。さらに、ドイツには多額の賠償金が課せられ、戦争責任は一方的にドイツとその同盟国に押しつけられた。こうした厳しい講和条約が締結されると、敗戦国、特にドイツで怒りの声が上がった。帝国の破産管財人として条約に調印せざるを得なかったヴァイマール民主制の諸政党は、「11月の犯罪者」「祖国の裏切り者」と罵られた。ヴェルサイユ条約の調印とともに、国際連盟規約が承認された。連盟は1920年に設立され、1926年にはドイツも加盟を果たす。しかし連盟は、平和を支える機能を有していなかった。ヨーロッパの列強政治を阻止することもできなければ、あらたに成立した国民国家における民族対立を解消することもできなかったのである。

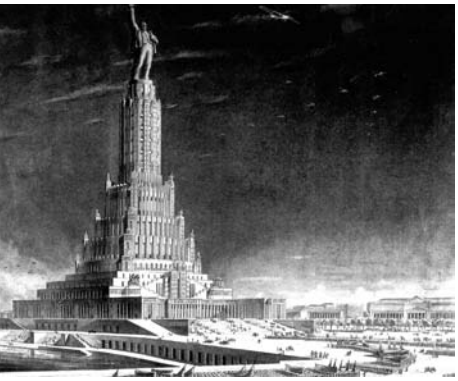
後退する民主主義

ユゼフ・ピウスツキ元帥（左）とグスタフ・オルリッチ＝ドレシェル将軍。「五月一揆」（1926年5月12日～15日）の際、ポーランド大統領スタニスワフ・ボイチェホフスキとの会談を前に、ワルシャワのポニャトフスキ橋にて。

Photo: picture-alliance / PAP

第一次世界大戦の結果、ヨーロッパでは国家の数が増えただけではなかった。こうした国々の多くが当初は民主主義的な体制をとっていたのをみると、戦争は民主主義の躍進を助けたようにも思われた。しかし、若い民主主義国家を苦しめたのは、戦後の物資の欠乏ばかりではなかった。民主主義の経験の欠如や、民主主義的な制度の脆弱さにも苦しんだのである。このため、特に中央ヨーロッパ東部と南ヨーロッパで、少数派をめぐる紛争が激化した。差別が日常となったのである。チェコスロヴァキアでは、住民の5分の1がドイツ人であった。ポーランドでは、ウクライナ人、ドイツ人、それにポーランド・ユダヤ人が人口に占める割合が高く、政情不安を受けて、1926年、ユゼフ・ピウスツキ元帥が武装蜂起して権力奪取に成功した。ユーゴスラヴィアでは、ギリシャ正教のセルビア人とカトリックのクロアチア人の対立が深刻であった。セルビア人の代議士がクロアチア人議員3人を射殺する事件が起こると、国王アレクサンダル1世は軍の支持を得て独裁制をしいた。ハンガリーでは、ミクローシュ・ホルティが、ベーラ・クンの率いたレーテ独裁を武力で打倒して専制をしき、貴族や大土地所有者の特権を擁護して、選挙権を大幅に制限した。同時に、ハンガリーでは反ユダヤ主義が広がった。トリアノン条約によりハンガリーは領土喪失を受け入れたが、これは国民的なトラウマとなった。再興を果たしたバルト諸国においても、民主主義は長続きしなかった。リトアニアでは1926年、エストニアとラトヴィアでは1934年から専制政治が行われた。

スターリン体制下のソ連



建築の形をとった権力の幻想 — ソヴィエト宮殿の設計コンペの受賞作。モスクワの救世主教会がわざわざ解体され、その跡地に建てられることになっていた。建設作業は1930年代に開始されたが、戦争により中断。1957年、フルシチョフは建設を中止した。

Drawing: picture-alliance / akg-images

ロシア内戦に勝利すると、ボルシェヴィキは崩壊した国民経済を再び活性化しようと試みた。1921/22年、およそ500万人が飢饉により命を落とすと、党の権力を守るため、レーニンは私的経済を取り入れた刺激策を一時的に容認した。1924年にレーニンが死ぬと、スターリンは徐々に単独支配を強め、「一国社会主義」の建設を宣言した。同時に、彼は共産主義インターナショナルを通して世界中の共産主義政党を指揮し、これにより世界の共産主義政党の政策は、1920年代半ば以降、モスクワの支配下に置かれることとなった。独裁的な権力をふるい、強制労働を大規模に押し進めて、スターリンは遅れた農業国を工業化しようとした。強制的集団化が推進される過程で、1929年以降、とりわけクラーク（自営農民）が連行され、不断に拡大していった収容所システム（後の「収容所群島」）に送り込まれた。その帰結をスターリンは甘受した — 1932/33年の壊滅的な飢饉により、およそ600万人が命を落としたのであった。1936年秋、スターリンは「大粛清」を開始する。これには「民族浄化」も伴っていた。粛清の対象は、特に共産党それ自身とソ連のエリートであった。彼らもまた恣意的に、容赦ない迫害を受けた。これは、イデオロギーと恐怖によって「新しい人間」を創り出し、社会主義へ、そして最終的には共産主義へと、無理やりにでも移行しようとする試みであった。ロシアの人権保護団体「メモリアル」によれば、1953年のスターリンの死までに、少なくとも500万人が政治的理由により身柄を拘束され、600万人以上が流刑になった。

イタリアのファシズム

本来、イタリアは第一次世界大戦の戦勝国であった。しかしナショナリストは「傷つけられた勝利」に激怒した。議会制君主国の体制をとっていたイタリアは、国土の北部と北東部の広い地域を併合することが認められはしたが、1915年に参戦した際には、さらに大きな領土の獲得を目指していたのである。戦争直後のイタリアを彩ったのは、社会不安、ストライキ、工場占拠、それに領土獲得である。ブルジョワはボルシェヴィズムの影におびえ、ファシズムの運動でもってこれに対抗しようとした。彼らの軍隊まがいのさまざまな組織は、残忍な攻撃を繰り返した。しかし政府は対策を講じず、数千の社会主義者の命が奪われた。1922年10月には、ファシスト党の指導者ベニート・ムッソリーニが「ローマ進軍」を演出、この芝居がかった脅しに屈して、イタリア国王は「ドゥーチェ（指導者）」ムッソリーニを首相に指名した。ムッソリーニはまず連立政権を形成した。この政権を支えたのは、軍と財界と官僚組織を母体とする昔ながらのエリートたちであった。公然たる独裁へと移行したのは、その後、1925年のことである。その基礎となったのは、ファシスト党の権力独占、三権分立の廃止、不断の大衆動員、ファシスト秘密警察による政敵の排除であった。ただし、後のドイツのナチス体制の支配とは異なって、国王とカトリック教会が権威をもち、また軍が独立していたため、ムッソリーニの権力は限定されたものであった。

1922年10月28日、「ローマ進軍」を企てて、首都ローマに近いサラリオ橋を渡るファシスト「黒シャツ隊」。

Photo: picture-alliance / Mary Evans Picture Library

世界恐慌の試練

1929年10月24日、ニューヨークで株式が暴落した。これは史上最も深刻な影響を及ぼす暴落となった。「黒い木曜日」と呼ばれたこの日が、世界恐慌の始まりとなったのである。銀行は支払不能に陥り、アメリカからの貸付金は大慌てでヨーロッパから引き上げられた。工業国では経済が落ち込み、数年もたたないうちに失業率は平均で25パーセントにまで上昇した。これは「黄金の20年代」の終焉であり、借金でまかなわれてきた戦後好景気の終焉であった。ヨーロッパのほとんどの地域で、政情不安と急進化が進んだ。しかし、こうした状況にあって、その強さを証明したのが、イギリスとフランスの議会制民主主義であった。イギリスでは、特に古くからの工業地帯が恐慌に苦しみ、失業者は300万人近くに達した。人々は巷に出て、「飢餓行進」を行って抗議した。しかし、内政と経済の上ではさまざまな軋轢があったにもかかわらず、各政治陣営も、経営者と労働者も、危機にあって依然、協力し合うことができた。政府は福祉の大幅な削減を取りやめ、これにより急進化の傾向には歯止めがかかった。フランスでは、農業が盛んであったため、恐慌の影響は比較的穏やかであった。しかしやがて、フランスでも失業者は100万を数え、極右組織は共和制に対して戦いを挑んだ。1936年に人民戦線政府が実施した福祉改革は、短期的には労働者に政治的満足を与えたが、市民陣営においては政治的な対立が激化し、ついに人民戦線は瓦解に追い込まれた。フランス第三共和制が再び安定したのは、ようやく1938年、ダラディエによる市民政府のもとであった。

世界恐慌の始まり（1929年、アメリカ）— 1929年10月24日、ニューヨークでは銀行や証券取引所が閉鎖に追い込まれた。

Photo: bpk

ドイツ民主主義の瓦解

1920年代後半、ドイツは順調な道を歩んでいるように思われた。1923年にはまだハイパーインフレが猛威をふるい、左翼も右翼も武装蜂起を試みて国は揺さぶられていたが、1924年から1928年にかけては平穏が戻ったかのように見えた。しかし1920年代の末、世界恐慌がヨーロッパに達すると、ドイツ民主主義の脆弱さが明らかとなった。ブルジョワのリベラリズムは浸食され、保守派は共和国に忠誠を示さず、大多数の企業家は社会闘争をますます過熱させたのである。1930年3月27日、社会民主党が率いる大連立政権のもとで、最後の議会制政府が瓦解した。かわって登場したのが「大統領政府」であり、大統領緊急令に依存した政治が行われた。失業者は1933年には600万人以上にまで膨れ上がり、ブリューニング（中央党）の率いる政府は、社会民主党の容認を得てデフレ政策と緊縮政策を実行した。その結果、大きな支持を集めることになったのが、共産党とナチスである。1932年7月の国会選挙では、ナチ党（37.4％）とドイツ共産党（14.5％）という反民主主義勢力が議会で多数を占めることとなった。ナチスと共産党と警察は、ほとんど毎日のように街頭で闘争を繰り広げ、内戦気分が漂った。こうした状況を意図的に誘発し、同時に、迫り来る「赤い危険」からの救済者として登場したのがヒトラーである。1933年1月30日、彼の策略は実を結んだ。ヒンデンブルク大統領は、彼を首相に指名したのである。

1932年7月31日の国会選挙。選挙運動員がそれぞれの政党のポスターをかかげている。

Photo: bpk

ナチスの権力掌握

1933年3月23日、アドルフ・ヒトラーは、国会議事堂前のクロル歌劇場で全権委任法を成立させた。議会を無力化するこの法律の採択には、3分の2の賛成が必要であったが、反対票を投じたのは社会民主党のみであった。社会民主党党首オットー・ヴェルスは、ナチ党員に向かって叫んだ。「自由と生命をわれわれから奪うことはできよう。しかし名誉を奪うことはできない！」

Photo: bpk

統治責任を負わせればヒトラーを手なずけることができるだろう、という保守派の期待は実現しなかった。1933年のうちに早くも全面的な独裁が急速に打ち立てられていったのである。2月27日から28日にかけての夜に国会議事堂が炎上した事件を受けて、警察とナチ突撃隊は政敵の狩り出しにかかった。ドイツ共産党は解体された。1933年だけでも10万人以上が拘束され、あらたに建設された強制収容所に収容された者も少なくなかった。3月5日に行われた選挙では、自由が大幅に制限されていた。ナチ党は勢力を拡大したものの、単独過半数を占めるにはいたらなかった（43.9％）。しかしナチスは「ラント（州）の同質化」を急速に進め、各地の地方自治体を勢力下に置くことに成功した。3月23日、全権委任法の可決により、国会は自らを無力となした。このとき、反対票を投じたのは社会民主党だけであった。すでに禁止されていたドイツ共産党の議員は、もはや投票することができなかった。6月22日には社会民主党も禁止され、その後、さまざまな市民政党は自ら解散していった。これに先立って労働組合も解体されて、5月10日にはドイツ労働戦線（DAF）が設立されていた。これはやがて約2500万の構成員を有するナチス最大の大衆組織となった。1934年8月2日にヒンデンブルクが死ぬと、ヒトラーは大統領の地位も手に入れた。「レーム一揆」を機に、ヒトラーは党内の敵を政治的理由により殺害し、国防軍に自らへの忠誠を誓わせた。こうして「総統国家」は不動のものとなった。これに抵抗することは、もはやほとんど不可能であった。

あらたな戦争への道

1936年3月7日、ヴェルサイユ条約とロカルノ条約に反して、マインツでライン川を渡るドイツ軍。市民がヒトラー式敬礼をして歓迎している。

Photo: picture-alliance / akg-images

ヒトラーは最初から、ヴェルサイユ条約体制を打倒して、「生存圏」を求めて東方で征服戦争を起こそうと目論んでいた。1934年、ドイツ帝国は国際連盟から脱退し、1935年にはヴェルサイユ条約を破って一般兵役義務を導入した。1年後、ドイツ軍は、国際条約に反して、非武装地帯に定められていたラインラントに進駐した。フランス政府もイギリス政府も、この事態に対し、弱々しい抗議を行っただけであった。これはヒトラーを勇気づけた。1936年、スペインで、民主的な選挙で成立した政府に対してフランコ将軍が反乱を起こすと、ヨーロッパ各国は協定を結んで不干渉を決定した。しかし、不干渉政策を頼りとしたのは民主主義陣営だけであった。ヒトラーとムッソリーニは「ベルリン＝ローマ枢軸」を形成し、ファシスト側に立って公然とスペイン内戦に介入したのである。1938年のオーストリア「併合」に対しても、西側諸国はあまり大きな反応を示さなかった。彼らがかかげたモットーは「融和」であった。1938年9月、英仏両政府は、ミュンヘン協定を締結して、ズデーテン地方のドイツ帝国への割譲を認め、チェコスロヴァキアを見捨てた。しかしこのとき、英仏両政府は、ヨーロッパに平和をもたらすことができたと信じたのであった。一方、孤立感を抱いたソ連は、イデオロギー的にはまったく相反するドイツとの同盟を模索した。1939年8月23日、ヒトラー＝スターリン協定が結ばれた。ベルリンとモスクワは相謀ってポーランドとバルト諸国を滅ぼす取り決めを結んだのである。ふたりの独裁者の接近により、戦争への道が整えられた。

第二次世界大戦

ドイツ軍がポーランドに侵攻した1939年9月1日、国境の遮断棒を取り壊すドイツ軍兵士。3日後、イギリスとフランスはドイツ帝国に対して宣戦布告した。第二次世界大戦の始まりである。

Photo: BArch, Bild 183-51909-0003 / Hans Sönnke

1939年9月1日、ドイツ軍はポーランドに侵攻した。これを受けてイギリスとフランスはドイツ帝国に対して宣戦布告した。ソ連は、事前の合意通り、まずポーランド東部を、それからバルト諸国を占領した。1940年、ドイツ軍はデンマークとノルウェーを占領、次いでフランスを蹂躙し、1940年6月14日、パリに入城した。6月22日、フランスは武装解除され、国土の分割を受け入れざるを得なくなった。フランス北西部はドイツの軍事司令官の支配下に置かれた。非占領地帯は、フィリップ・ペタン将軍の率いるヴィシー政権が統治したが、ドイツに従属し、1942年にはここにもドイツ軍が進駐した。占領政策には国際法が適用されることになってはいたものの、この約束はすぐに破られてしまった。例えば、フランス・レジスタンスによる暗殺事件が起こると、人質の銃殺が行われたのである。人々はドイツに連行されて強制労働をさせられた。これに対してパルチザンとレジスタンスの運動は急進化した。2万人のフランス人がレジスタンスで命を落とした。1941年末、戦争は全世界に拡大した。12月7日（米国時間）、日本が真珠湾を爆撃して、アメリカに戦いをしかけたのである。1940年にすでに日本と三国同盟を結んでいたドイツとイタリアは、数日後、アメリカに対して宣戦布告した。1941年以降、ドイツ軍は北アフリカに軍を進めた。さらにドイツ軍は突如、ソ連に侵攻し、当初、とどまることを知らないと思われるほどの進撃を続けた。太平洋戦線においても、日本の進軍はほとんどくい止めようもないと思われた。

東部における殲滅戦

1939年のドイツ軍のポーランド侵攻は、すでに人種イデオロギーに基づく殲滅戦の様相を呈していた。まず、スターリンと同じく、ヒトラーも暴力政治を行い、600万以上のポーランド人がドイツ占領下で命を失った。その半数は、ホロコーストで殺されたユダヤ人であった。1941年6月22日のソ連侵攻は、最初から、「主人たる人種」であるドイツ人のための新しい生存圏を獲得し、中央ヨーロッパ東部の「劣等な人間」を強制労働により経済的に搾取することを目指していた。ソ連の死者は2700万を数え、そのうち1800万は民間人であった。しかしソ連は攻め寄せるドイツ軍をはね返しただけでなく、1945年春にはベルリンまで押し戻すことができた。ドイツの殲滅戦で最も恐るべき武器は飢餓であった。300万を超えるソ連の兵士が、ドイツの捕虜収容所で栄養失調のために命を落とした。900日にわたるレニングラード包囲戦だけで、ドイツは100万人近くを餓死させた。また、捕虜にしたソ連赤軍の政治将校を即決裁判で銃殺したばかりでなく、報復行動においては民間人も無数に銃殺した。スターリングラードの戦いを転機として東部戦線で敗北を喫すると、退却するドイツ軍は「焦土作戦」を実行した。1944年8月にはワルシャワ蜂起が起こったが、これは鎮圧され、ナチ親衛隊と軍によってワルシャワ市街は破壊された。このとき、ソ連赤軍は蜂起を呼びかけたものの、結局支援しなかった。これが東部における殲滅戦の残忍な帰結であった。

焼け落ちたソ連の町ムルマンスクの老婦人。ソ連の戦争写真家エフゲニー・ハルデイの写真。ドイツ軍は市街と不凍港の占領に失敗したが、その後、ムルマンスクは、ソ連ではスターリングラードに次いで激しいドイツ軍の空爆の対象となった。

Photo: picture-alliance/ZB

ヨーロッパ・ユダヤ人の迫害と殺害

ヒトラーが権力を奪取すると、反ユダヤ主義と人種差別が国家の基本原則となった。ドイツ・ユダヤ人は「職業禁止」を課され、ユダヤ人商店主はボイコット・キャンペーンに苦しめられて、公然と侮辱された。1935年のニュルンベルク人種法により、公民権の剥奪はさらに進んだ。1938年11月9日、ユダヤ人に対する敵対は、最初の暴力の狂宴に転じた。この十一月ポグロム（※）では、ナチの親衛隊員と突撃隊員はシナゴーグに放火し、商店や住居を略奪した。何万ものユダヤ人が強制収容所に連行されて虐待を受け、数百人が殺害された。続いて「ユダヤ人をドイツ経済界から排除するための命令」が制定され、ユダヤ人財産の「強制的アーリア化」が進められた。1930年代、およそ25万人のユダヤ系ドイツ人が国外に移住したが、19万人は、1939年の末にいたるまで、故郷を離れようとはしなかったか、あるいは離れることができなかった。ポーランド占領により、ホロコーストは全ヨーロッパ的な出来事となった。ポーランド・ユダヤ人はゲットーに集められ、何千人もが恣意的に銃殺された。ドイツのソ連侵攻は、組織的な民族抹殺の幕開けとなった。警察と親衛隊の実行部隊が、軍の支援を受けて、何十万ものユダヤ人の殺害を始める一方、親衛隊は産業化された大量殺戮の用意を整えた。1942年1月20日のヴァンゼー会議で、国家機構は公式に「ユダヤ人問題の最終的解決」に向けて結束することとなった。ベウジェツ、ソビボル、トレブリンカ、それにアウシュヴィッツ＝ビルケナウの絶滅収容所では、他に例をみない殺害プログラムが実行された。殺害されたヨーロッパ・ユダヤ人は、少なくとも600万人にのぼる。

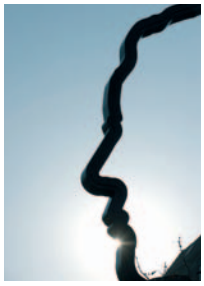
（※ポグロム＝ユダヤ人に対する集団的暴力行為）

アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所のメインゲート、撮影は1945年以後。アウシュヴィッツ＝ビルケナウでは、100万人のユダヤ人、少なくとも7万人のポーランド人、2万1000人のシンティとロマ、1万5000人のソ連兵捕虜が殺害された。

Photo: bpk

ナチスに対する抵抗

ドイツでは、ナチス政府に抵抗した者はわずかしかいなかった。社会民主党と共産党は、ヒトラーに対する労働者蜂起を期待したが、実現しなかった。1933年、彼らはさまざまな非合法グループを結成したものの、すぐに叩きつぶされた。ヒトラーの成功を受けて、「ドイツ民族共同体」はほとんど一致してヒトラーに賛意を表したのである。抵抗運動があらたに組織されたのは、ようやく戦争が迫ってからのことであった。1938年、ヒトラーの戦争準備をくい止めようと軍の将校たちが共謀した。しかし、ミュンヘン会談でヒトラーが勝利を収めると、計画は実行されずに終わった。1939年11月8日には、ゲオルク・エルザーが爆弾による暗殺を図ったが、ヒトラーは偶然により難を逃れた。ドイツがソ連を奇襲する前には、モスクワのスパイ組織「赤いオーケストラ」が警告を発したが、情報は生かされなかった。帝国内では、抵抗する者たちは孤立していたのである。しかしドイツ占領下の国々ではそうではなかった。占領軍への協力は確かに日常のこととなっていたが、それでもほとんどいたるところで抵抗運動が行われ、武器を持たない不従順により、そしてやがては武器を手にして、人々は占領軍に挑んだ。デンマークとオランダのユダヤ系住民移送に対する抵抗運動、フランス、イタリア、ユーゴスラヴィア、ギリシャ、ソ連のパルチザン、チェコスロヴァキアの抵抗運動、そして何よりもポーランドの国内軍とワルシャワ・ゲットーの住民たちが、ヨーロッパ自由史の一画を担った。1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂もここに加えることができる。これが成功していたら、戦争はもっと早く終結していたであろう。ナチス・ドイツを外側から打ち倒すには、東はソ連、西は米英という、およそ不釣り合いな者同士が手を組まねばならなかった。



2011年11月8日、ベルリンでゲオルク・エルザー記念碑の除幕式が行われた。1939年11月8日、ヒトラーは、ミュンヘンのビアホール「ビュルガーブロイケラー」を予定より早めに立ち去ったせいで、ゲオルク・エルザーがしかけた爆弾から逃れた。建具屋として働いていたエルザーは、暗殺によって戦争の拡大を阻止しようとしたのである。戦争が終わる直前、彼はダッハウ強制収容所で処刑された。

Photo: picture-alliance/dpa/Sebastian Kahnert

戦争の終結と新しい秩序

1945年4月29日、アメリカ軍はダッハウに進軍した。写真は、解放者を歓迎するダッハウ強制収容所の収容者たち。

Photo: bpk

1945年5月8日、ドイツにおける第二次世界大戦は終わった。ヨーロッパで4500万人の死者、というのが、その恐るべき帰結である。アメリカが広島と長崎を原子爆弾で破壊した後、8月15日には太平洋でも武器がおさめられた。4つの占領地域に分割されたドイツでは、戦勝国が統治権力を握った。戦勝国は、ドイツの継続的な安定を目指し、非軍事化と分権化、それに住民の非ナチ化と民主化により、これを達成しようとした。すでに1945年2月のヤルタ会談で、連合国は戦後ヨーロッパをそれぞれの勢力圏に分割することを決定しており、中央ヨーロッパ東部の広範な地域はソ連に帰属することになっていた。1945年7月のポツダム会談では、中央ヨーロッパ東部に統一的な国民国家を創出することで合意していた。東プロイセン北部はソ連領となり、ポーランドはオーデル川とナイセ川まで、一気に西方へ領土を広げた。ポツダム協定では、ポーランド、チェコスロヴァキア、およびハンガリーからのドイツ人住民の「移送」が「秩序ある人道的な方法」で行われなければならないとされていた。しかし、1944年以降、実際に撤退し、逃亡し、そして最終的には追放された1250万のドイツ人にとって、現実はまったく異なるものであった。

やがて、民主主義体制をとる西側諸国と共産主義のソ連との相違が、強権政策の点でもイデオロギーの点でも明らかになっていった。東西対立の始まりである。これを受けて西ヨーロッパの統合は進展し、1950年代になると、西ドイツもこれに加わることになった。

西の民主主義、東の独裁

ソ連の個人崇拝 — 1949年12月、モスクワのスターリン生誕70年の祝典では、等身大をはるかに超える独裁者の像の周りを合唱隊が取り囲んだ。

Photo: picture-alliance / ZB / Jewgeni Chaldej

1947年、西側諸国とソ連の間の亀裂は、歴然たるものとなった。アメリカ大統領トルーマンは、すべての「自由な民族」に対し、「全体主義」との戦いにおける支援を約束した。ワシントン政府は同時にヨーロッパの復興を支援するマーシャルプランを発表した。第一次世界大戦の後とは異なり、アメリカはヨーロッパから撤退しなかった。スターリンは、このときまではまだ、中央ヨーロッパ東部に政治的多様性が生まれる余地を残していたが、1948年以降は支配地域のソヴィエト化を遂行した。共産主義政党による支配と計画経済は容赦なく進められ、わずかな抵抗運動も迫害された。キリスト教会も、とりわけ激しい迫害を受けた。1945年以降、バルト諸国、ポーランド、ルーマニア、ウクライナで武装闘争が発生したが、いずれも情け容赦なく鎮圧され、公開裁判が絶え間ない恐怖の雰囲気をかもし出した。ヨーロッパには「鉄のカーテン」がひかれた。これは大陸ばかりではなく、ドイツとベルリンをも分断することとなった。1949年、ドイツが東西に分裂してふたつのドイツ国家が成立すると、それぞれの国家はそれぞれの側の政治経済システムに組み込まれた。ドイツ民主共和国（東ドイツ）は、最初から独裁体制をしいた。これに対し、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）は自由選挙によって正当性を得た。ほとんどの西ヨーロッパ諸国と同じく、西ドイツでは議会制民主主義が成立し、経済復興と社会保障制度の拡充により、ますます幅広い支持を獲得していった。両大戦間の時代とは異なって、政治闘争の場は街頭から議会に移った。議会ではいろいろな政治的陣営が連立を組むこともできるようになった。

分断世界における冷戦

アメリカの核実験（1953年、ネバダ州）。1950年代、米ソ両超大国による核軍拡競争が始まった。

Photo: picture-alliance / akg-images

1949年8月29日、ソ連は初めて原爆実験を行い、核兵器保有国としてアメリカと肩を並べた。これは軍拡競争の始まりであり、東西冷戦にはあらたな次元が生じた。1950年夏、朝鮮戦争が勃発すると、東西対立は初めて、熱い戦争に転ずる危機を迎えた。これを受けて西側諸国は西ドイツの再軍備を決断、西ドイツは1955年、NATO（北大西洋条約機構）に加盟して、再軍備が行われた。一方、東ドイツは1956年、ワルシャワ条約機構に加盟した。ドイツは冷戦の焦点となったのである。スターリンの後を継いだニキータ・フルシチョフは、1956年、資本主義と社会主義の「平和共存」をかかげて、現状承認の姿勢を示した。しかし彼は同時に、分断されたベルリンからの西側勢力の排除も試みた。西ベルリンを経由した住民の西への逃亡により、東ドイツが国力疲弊の危機に見舞われると、モスクワ政府は、東独社会主義統一党の強い要請を受け、自由な西側への最後の抜け穴を封じることを決定した。こうして1961年8月13日、ベルリンの壁の建設が始まった。東独社会主義統一党による独裁はそのおかげで生きながらえ、ドイツの分断は固定された。しかし、東ドイツの住民の犠牲により冷戦の火種が静められたと思う間もなく、1962年10月、ソ連の中距離ミサイルがキューバに配備され、世界は核戦争の縁に立たされた。これ以後、両陣営では、核の地獄を回避するには、現状を相互に承認して緊張緩和のプロセスを進める以外に道はない、という認識が深まった。

東側ブロックにおける民衆蜂起

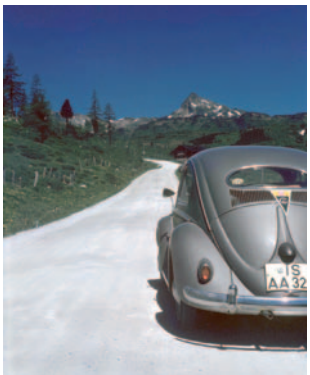
1956年2月、ソ連共産党第20回党大会で、フルシチョフはスターリンの犯罪に対する総括を行った。この時期、短期間ながら、共産主義が転換する期待が芽生えた。ポーランドでは、1956年秋、大規模デモを機にヴワディスワフ・ゴムウカが政権についた。彼は強制的集団化を廃止し、教会に自由を認め、国家公安局の活動を抑制した。ポーランドでは、党の指導的な役割については手つかずのままであったが、同じ時期、ハンガリーでは市民革命・民主主義革命が起こった。改革派共産主義者のイムレ・ナジは、複数政党からなるハンガリー政府の首相に就任し、ワルシャワ条約機構からの脱退を宣言した。モスクワ政府は軍事介入によってこれに応えた。東ドイツでは、すでに1953年6月17日、民衆蜂起がソ連の戦車によって鎮圧されていたが、東独社会主義統一党の党首ヴァルター・ウルブリヒトはこの機に乗じて批判者の清算を図った。彼は、ワルシャワ条約機構軍の戦車が1968年、チェコスロヴァキアの「プラハの春」を蹂躙した際にも、クレムリンの側に立っている。1970年代半ばになると、ポーランドでは抵抗運動が次第に力を増して、1980年には独立労組「連帯」が承認を勝ち取り、やがて構成員1000万人を数えるようになった。首相のヴォイチェフ・ヤルゼルスキ将軍は、モスクワの圧力を受け、1981年、戒厳令をしいて「連帯」を禁止した。非スターリン化が進展する中で、公然たる暴力と恐怖の雰囲気は共産主義独裁体制において次第に終焉しつつあった。しかしそれでも抵抗勢力は、あるいは単にその嫌疑をかけられただけでも、最後まで迫害され、叩きつぶされ、身柄を拘束されたのである。

1956年10月24日、ハンガリー蜂起が始まった次の日、激昂した市民は、ハンガリー国民劇場前に立っていた憎むべき独裁者スターリンの像を引き倒した。

Photo: picture-alliance / associated press / Arpad Hazafi

両体制間の経済競争

「あなたたちがこんなにも恵まれていたことはこれまでありませんでした！」イギリス首相ハロルド・マクミランが1957年にサイン帳に書き込んだこの言葉は、西ヨーロッパの広い地域にあてはまった。「経済の奇跡」により、1950年代以降、暮らしは豊かになり、完全雇用が実現し、賃金は上昇した。消費社会と福祉国家が安定の指標となったのは、西ドイツの民主主義にとってだけではない。どちらの政治陣営の側でも、生活状況の改善を約束して、住民の支持をとりつけようとした。しかし東側ブロックでは、物資の供給は常に危機的な状況にあった。「今日の労働が明日の生活を支える」という、豊かな未来の約束は、結局のところ果たされることはなかったのである。欠乏は激しかったが、それでもなお、ソ連の経済システムは、長期にわたって期待や懸念を生み出すきっかけを与え続けた。1957年、ソ連が初めて人工衛星の打ち上げに成功したときには、西側諸国はモスクワの技術的・軍事的潜在力に衝撃を受けたのであった。1970年代に入ると、石油危機によって無限の成長に終止符が打たれ、西側諸国では失業率が上昇した。このとき、高度に発達した社会保障制度が社会の安定に大きな役割を果たした。他方、東側ブロックでは、世界的な経済危機の前夜、致命的な方針転換が行われていた。資源がどんどんと住宅建設や消費につぎ込まれていったのである。住民の支持を得ようとして社会保障の充実も図られたが、これも大部分が西側からの借金でまかなわれた。債務超過は拡大し、経済はますます疲弊して、経済状況は逼迫していった。こうして、共産主義政権は、1980年代になると奈落に転落することになる。



マイカーでイタリアへ — フォルクスワーゲン・ビートルに乗る者に限らず、1950年代末以降、生活は明らかに向上した。

Photo: picture-alliance / Marc Suski

西ヨーロッパにおけるリベラル化のプロセス

西側では、暮らしはますます豊かになっていったが、これには大きな社会的・文化的変化がともなっていた。個人の自由と自己発現への希求はますます大きくなった。ロックンロールと長髪とジーンズで、戦後の若者は古い権威に挑んだのである。1960年代に入ると、若者の運動は政治化していった。1968年、学生たちはいたるところで街頭に出た。フランスやイタリアでは労働者と手を結ぶこともあった。抗議の矛先が向けられたのは、アメリカのベトナム戦争や、政治・経済・社会の硬直した構造であった。デモに参加した多くの者は、大いなる反乱を夢見た。西ドイツでは、これまでにない厳しさで、過去のナチ時代が問い直された。体制側はデモに衝撃を受け、当初は警察権力で対処した。急進化した左派少数派は、あらたなファシズムの登場を見、イタリアと西ドイツでは、1970年代、「体制」をテロによって覆そうと、いくつもの小さなグループが地下に潜った。最終的には、西側の政治システムは、反抗する若者を統合することに成功した。西側の文化的転換は、鉄のカーテンでとどまりはしなかった。また、中欧・東欧の若者は、プラハの春で自分たちの「1968年」を体験していた。しかし東側の政権には、ますます個人化して自覚を強める若者を体制に取り込む力がなかったのである。これにより、東側では、支配する者とされる者の間の亀裂が、いっそう深まることとなった。

1967年11月9日、ハンブルク大学の学長交代に際して、抗議活動を行う社会主義学生同盟のメンバー。1960年代の学生運動は古くからの権威を疑問視し、断固として改革を要求した。横断幕には「教授服の下には千年の黴」とある。

Photo: picture-alliance / dpa

緊張緩和政策

1975年7月30日、全欧安全保障協力会議に際して、東ドイツ社会主義統一党党首エーリヒ・ホーネッカー（左）と言葉を交わす西ドイツ首相ヘルムート・シュミット。

Photo: Bundesregierung / Reineke

1962年のキューバ危機の後、アメリカとソ連は緊張緩和に取り組んだ。西ドイツにおいても、ドイツ問題は全ヨーロッパ的な枠組みの中でのみ解決できる、という確信が強まった。西ドイツのブラント政府は、ソ連およびポーランドと武力不行使条約を結び、オーデル・ナイセ線を事実上、承認し、また、ベルリン4カ国協定も結ばれた。こうした準備を経て、1972年、東西ドイツ基本条約が調印された。20年以上にわたって言葉を交わすことのなかった両ドイツ国家は、この条約により互いの併存を規定したのである。東ドイツ政府は、事実上の承認に対し、ドイツ内の旅行と家族の出会いを容易にする措置をとって返礼した。ただし、「接近を通した転換」に取り組む西ドイツ政府の政策に、東ドイツ政府は「フェルトのスリッパを履いた侵略」を見、これまで唱えていたドイツ統一の目標からは距離を置くようになった。ヨーロッパにおける緊張緩和政策の最大の成果が、1975年、ヘルシンキにおける全欧安全保障協力会議の最終文書の採択である。この文書の調印国は、軍事分野における信頼醸成措置をとり、人権と基本的自由を尊重し、密接な協力を推進する義務を負った。東側ブロックの諸国では、勇気ある人々は文書を文言通りに受け止めて、約束された自由権を要求した。その最初のシグナルとして見過ごせないのが、2年後のチェコスロヴァキアにおける「憲章77」である。ヴァーツラフ・ハヴェルなど、この運動を率いた者たちは、1989年、体制を打倒した「ビロード革命」においても指導的な役割を果たす。全欧安全保障協力会議のプロセスによって共産主義体制が望んだのは現状の固定であった。しかし結局、これはその消滅を促進することになったのである。

平和革命

歴史的瞬間 — オーストリア外相アロイス・モック（左）とハンガリー外相ジュラ・ホルンは、1989年6月27日、鉄のカーテンを象徴的に断ち切った。

Photo: picture-alliance / dpa

1970年代と1980年代を特徴づけるのは民主主義の潮流である。これはまずポルトガル、スペイン、ギリシャの専制政治を呑み込んだが、鉄のカーテンの前では押しとどめられたかと思われた。1980年代初め、あらたな軍拡競争と、ソ連のアフガニスタン戦争により、両陣営間ならびに共産主義の勢力圏内部の緊張が高まった。1986年になると、ソ連共産党書記長ミハイル・ゴルバチョフが、改革を行って体制崩壊を阻止しようと試みた。東ドイツとチェコスロヴァキアの政府は、グラスノスチとペレストロイカを拒否した。他方、ポーランドでは、これにより「連帯」が再び承認されて、1989年8月に初めて半自由選挙が行われ、野党が勝利をおさめた。ハンガリーでは、共産主義の改革派が、野党に突き上げられて、民主主義への道を整えた。9月には、ハンガリーとオーストリアの国境が開放され、「鉄のカーテン」が落ちた。東ドイツでは、最後の危機が先鋭化した。大量脱出が起こり、デモはますます激しくなって、秋、ついに社会主義統一党指導部は膝を屈せざるを得なくなった。1989年11月9日のベルリンの壁の崩壊は、ヨーロッパにおける共産主義独裁に対する平和革命の象徴となった。しかしルーマニアとバルト諸国では、革命は暴力の影に覆われた。ユーゴスラヴィアの解体は悲劇的な経過をたどり、血みどろの内戦に突入した。1991年8月には、共産主義者がモスクワで反乱を起こし、時計の針を戻そうとした。しかしこれは抵抗を受けて失敗に終わり、12月、人々はソ連の最後を祝ったのであった。

変革、出発、あらたな始まり

2007年1月、ストラスブールにおける欧州議会。

Photo: Bundesregierung / Kühler

中欧・東欧における平和革命によって、ヨーロッパの分断を克服する道が整えられた。早くも1990年10月3日、近隣諸国の同意を得てドイツの統一が回復され、やがてヨーロッパ統合への歩みがこれに続いた。経済と通貨の統合に関する合意に続いて、1992年、マーストリヒト条約が締結され、これに基づいて欧州共同体は、共通の外交・安全保障政策をもち、司法・内政分野において協力する欧州連合へと発展した。統合の象徴として、2002年、ユーロが統一的な支払手段として、まずヨーロッパ12カ国で導入された。1990年代には、旧共産主義諸国が次々にEUに加盟した。こうした国々においては、加盟要求は幅広い社会的コンセンサスに対応するものであった。人々は、EU加盟により、ヨーロッパの自由と民主主義の文化や、西側の豊かな暮らしに関わることを期待したのである。さらに、多くの者にとって、EU加盟条件は、自国の民主主義的変革を押し進めるには欠かせない改革の原動力となった。最後に、EUやNATOへの加盟は、再び勝ち取った国家主権を保障するものとみなされた。2004年5月1日、かつては共産主義に支配されていた8つの国がEUに受け入れられた。ヨーロッパがこの時ほど一体となり、民主主義的であり、未来への希望に満ちていた時は、かつてなかった。

課題としてのヨーロッパ

戦争で荒れ果てたヨーロッパ大陸では、市民に平和と安定と豊かな暮らしを保証する統一されたヨーロッパのビジョンは輝きを増した。2度の世界大戦の経験と、共産主義ブロックによるあらたな脅威は、かつての仇敵同士に、1950年代以降、まずは共通の西ヨーロッパ市場を作り出す力を与えた。その基本的な前提となったのが、フランスとドイツの和解であった。この和解は、敵対イメージは克服できることを証明した。共産主義独裁に対する平和革命は、将来への展望を開くあらたな力をヨーロッパの理念にもたらした。この力は、2004年のEUの東方拡大により、さらなる高みに達した。それにもかかわらず、ヨーロッパの自覚は、EUを一夜にして世界で最も重要な域内市場に変えた急速な政治的・経済的統合プロセスの背後に隠れたままであった。EUが平和をもたらす勢力としての役割を見いだすのも簡単ではなかった。1990年代には、旧ユーゴスラヴィアにおける内戦と「民族浄化」をやめさせることはできなかったのである。そして今、深刻な金融危機に焚きつけられ、あらたなナショナリズムと保護主義に助長されて、EU懐疑論がますます大きくなっている。これに対処するためのコンセプトをEUはまだ持ち合わせていないのである。

この展示会は、ヨーロッパの最近100年の歴史をいくつかの光で照らし出し、これにより、統一された福祉社会としてのヨーロッパに代わるものはないということ、そして — 20世紀ヨーロッパ史の深遠と比べれば — 今ある問題はすべて解決することができ、また解決していかなければならないということを、明らかにしようとするものである。

ヨーロッパの建設 — ここで象徴的に行われていることは、ヨーロッパの現実において常にあらたな承認を得ていかなければならない。「ヨーロッパはわれわれの未来である」という意見に賛成するかどうかを聞かれたドイツ人のうち、2005年には62パーセントの人が「はい」と答えていたが、2011年になるとその割合は41パーセントに低下した。

Photo: European Union, 2013

奥付

制作

現代史研究所は、1949年成立。ミュンヘンとベルリンを拠点とする。第一次世界大戦以降の全ドイツの現代史を、特に国際的な視点から研究するドイツ唯一の歴史研究所である。www.ifz-muenchen.de | **ドイツ文化ラジオ**は、文化と音楽に重点をおいて、さまざまなテーマをさまざまな切り口からとりあげる文化番組である。番組では、放送劇、フィーチャー、ライブコンサート、子供番組、文化シーンからの最新の報告、最新の政治情勢など、多数の芸術的なオリジナル作品を提供している。www.deutschlandradiokultur.de | **旧東独社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金**は、さまざまなプロジェクトの支援や、独自の多彩な活動を通して、ドイツとヨーロッパにおける共産主義独裁の原因、歴史、そしてその帰結と幅広く取り組んでいる。www.bundesstiftung-aufarbeitung.de

執筆

アンドレアス・ヴィルシング（教授・博士）〔Prof. Dr. Andreas Wirsching〕は、ミュンヘン・ベルリン現代史研究所の所長。ミュンヘン・ルートヴィヒ・マクシミリアン大学で近現代史を教える。2012年には『自由の代償。ヨーロッパ現代史』が刊行された。| **ペートラ・ヴェーバー（博士）**〔Dr. Petra Weber〕は、現代史研究所研究員。社会主義、ヴァイマール共和国、東西ドイツ国家を中心に研究している。

プロジェクトマネジメントおよび構成
展示会のキュレーターは、旧東独社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金の**ウルリヒ・メーレルト（博士）**〔Dr. Ulrich Mählert〕。図版リサーチの責任者も務める。展示会の構成は、ライプツィヒの歴史家でグラフィックデザイナーの**トーマス・クレム（博士）**〔Dr. Thomas Klemm〕。すでに幾度も連邦検証基金の歴史展で構成を担当している。
www.thomasklemm.com

参考文献

ドイツとヨーロッパの現代史に関する文献は枚挙いとまがない。以下に推薦する書籍は、本展示会のテーマの理解を深めるのに役立つものである。「極限の時代」とは、2012年に死去したイギリスの歴史家エリック・ホブズボームが提唱した概念であり、1994年に出版された彼の20世紀世界史のタイトルでもある（邦訳書では「極端な時代」）。この書は今日もなお読むに値する〔Eric Hobsbawm: Age of Extremes. The Short Twentieth Century, 1914–1991, Michael Joseph/Vintage Books 1994 ／邦訳：エリック・ホブズボーム（河合秀和訳）『20世紀の歴史 — 極端な時代』上・下（三省堂、1996年）〕。
オランダのジャーナリスト、ヘールト・マックは、『ヨーロッパにて』で「20世紀をめぐる旅」に出て、過去と現在を見事に結び合わせる〔Geert Mak: In Europa. Reizen door de twintigste eeuw, L.J. Veen 2004 ／邦訳：ヘールト・マック（長山さき訳）『ヨーロッパの100年：何が起き、何が起きなかったのか』上・下（徳間書店、2009年）〕。
1914年から1945年の世界大戦の時代についてさらに取り組みたい人には、ハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラーの『西洋史』をおすすめする〔Heinrich August Winkler: Geschichte des Westens, C.H.Beck 2009 / 2011 ／未邦訳〕。
1945年以後のヨーロッパ史についてはイギリスの歴史家トニー・ジャット〔Tony Judt: Postwar: A History of Europe Since 1945, Penguin Press 2005 ／森本醇・浅沼澄訳『ヨーロッパ戦後史』上・下（みすず書房、2008年）〕、1990年以後の時代については、本展示会の共著者でもあるアンドレアス・ヴィルシングの『自由の代償』〔Andreas Wirsching: in „Der Preis der Freiheit, C.H. Beck 2012 ／未邦訳〕が探求している。

歴史に興味のある人になら誰にでも、連邦政治教育センター〔Bundeszentrale für politische Bildung〕のウェブサイトwww.bpb.de/geschichte（ドイツ語・英語）がおすすめである。このサイトにはヨーロッパ史に関する論文や資料、刊行物が多数掲載されており、無料でダウンロードしたり、わずかな保証手数料で注文したりすることができる。

展示会「極限の時代における独裁と民主主義。20世紀ヨーロッパ史を照らし出す光」に関するさらに詳しいインフォメーションと、その注文方法については、下記ご参照。
www.bundesstiftung-aufarbeitung.de/ausstellung2014

謝辞

制作者は、エージェントのdpaピクチャー・アライアンス社〔dpa Picture-Alliance GmbH〕と、同社のHenning Schröder氏およびSebastian Knecht氏に感謝する。計画が実現できたのは、彼らが提示してくれた好意的な条件と、ヨーロッパの数多くの関連アーカイヴにおける彼らの積極的なリサーチのおかげである。また制作者は、図版エージェントbpk、プロイセン文化財団〔Stiftung Preußischer Kulturbesitz〕、ドイツ連邦公文所館〔Bundesarchiv〕、ドイツ連邦新聞情報庁〔Bundespresseamt〕が所有する図版を本プロジェクトのために制限なく利用することができた。この支援に対し、Hanns-Peter Frentz（bpk）、Dr. Oliver Sander（BArch.）、Arvid Brunnemann（BPA）の各氏に感謝する。ドイツ放送アーカイヴ（DRA）に対しては、展示会にオーディオ・ドキュメントを加えることができたことを感謝する。制作者は特に、DAIMLER AGに対し、寄付による展示会プロジェクトへの支援を感謝する。
制作者は最後に、展示会のコンセプトやテキストに目を通して批判的にコメントしていただいたDr. Manfred Wilke、Dr. Wolfgang Benz、Dr. Peter Steinbach、Dr. Krzysztof Ruchniewicz、さらにはDr. Jens Schöneの各教授に感謝する。

ご注意ください

すべての写真、オーディオ・ドキュメント、テキスト、さらに展示会の構成は、著作権で保護されており、著作権者の同意なしに複製、変更、またはその他の形で頒布することは認められません。写真の著作権者はそれぞれ図版説明に記載しています。

展示会について、ご質問やご意見はございますか？　また、展示会に使用した資料については入念に調査をして利用許可を得てはおりますが、それでもなお、どなたかの著作権や利用権に対する配慮が欠けている場合がございましたでしょうか？　どうぞウルリヒ・メーレルトまでご連絡ください。
ausstellung2014@bundesstiftung-aufarbeitung.de

このQRコードで旧東独社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金(BStA)の
フェイスブックサイトにアクセスできます。BStAのフェイスブックをフォローしてください。
www.facebook.com/BundesstiftungAufarbeitung

Geschichte
zum Hören

www.auswaertiges-amt.de
www.deutschland.de
www.100-jahre-erster-weltkrieg.eu